

書評と紹介

述べてきたいくつかの批判的な論点は、本書のようなまとまった研究成果が刊行されることによって、初めて明確化してきたものでもある。その意味でも評者は本書から学ぶところが多かった。この書評は評者自身の国家神道論の見直しの機会となったが、神道史研究がより広い視野を得て、さらに豊かな成果をあげていくための方法的な問題提起でもある。そのような対話的意図をくみ取っていただければ幸いである。

西村 明著

『戦後日本と戦争死者慰霊』

——シズメとフルイのダイナミズム——』

有志舎 二〇〇六年二月二十五日刊

A5判 二二九十六頁 五〇〇〇円＋税

川村 邦光

一 本書の目的

今年の八月はどのようなものだろうかなどと思いながら、本書を読んだ。すでに沖繩では、六月二三日に「沖繩全戦没者追悼式」が開催された。追悼式には、安倍首相が参列した一方で、集団自決に日本軍の強制があつたとする記述を削除した教科書検定を批判する横断幕が掲げられていた。戦死者にどのように向かい合うのか、どのように追悼するのかをめぐる論争はまだ終わっていない。まだ「戦後」は続いているのである。

まず本書の大きな特徴をひとつ挙げてみよう。表題に掲げられているように、「戦争死者」という用語がそれである。この戦争死者には、戦死者と戦災死者の戦争で死んだ二種の死者を含めている。そこには、これまでの研究において、「戦闘員の死だけを対象としてきた戦死者慰霊をめぐる先行研究の研究スタンス」(四頁) に対する批判がある。

私は「全国戦没者追悼式」などを考えてみる際、戦争で死んだ者を一括している戦没者という用語ではなく、戦死者という

言葉を用いて、それに戦闘員の戦死者も戦災死者も含めて、個別の戦死者の殺し／殺された、戦死の位相、また慰霊や顕彰の位相を考えることが大切ではないかと記したことがある（川村邦光「はじめに」『戦死者とは誰か』川村編『戦死者のゆくえ』青弓社、二〇〇三年、参照）。そこには、戦災死者も単なる「無辜」の犠牲者ではなく、侵略戦争・総力戦を歓迎し迎合して、それぞれの場で戦った戦争の加担者に他ならないという考えがあった。

本書の著者が指摘するように、確かに靖国問題との関連で、戦闘員の死だけが特権化もしくは特別視されてきたのであり、戦争による死者を一括するとともに、区別することが、政治的にも、慰霊・顕彰といった儀礼の場を考察するうえでも求められていよう。著者の戦死者の概念は、一般に馴染みがあり、戦闘員の戦死に限定されかねない戦死者という言葉よりも、戦死の複合的な諸相を明るみに出すことができると思われる。

著者は「本書が理解の対象としているのは、戦争によって亡くなった者たちに対して、戦後を生きる者たちが慰霊をおしどどのように向き合ってきたのかということである」（二頁）と記し、また慰霊に関する「宗教学的な視点での研究の深化」（九頁）を指摘している。慰霊を宗教現象、宗教行為、宗教的表象としてとらえ分析すること、それが著者の主要テーマであるといえよう。つぎに、本書の構成を簡略して挙げておこう。

はしがき

I 戦争死者へ向き合うこと

- 第一章 戦争死者の慰霊を問い直す
- 第二章 ウチの死者とヨソの死者と
- 第三章 慰霊と暴力連関

II 戦後慰霊と戦争死者——長崎原爆慰霊をめぐって——

- 第四章 戦後慰霊の展開とその二源泉
- 第五章 岡正治における慰霊と追悼
- 第六章 死してなお動員中の学徒たち
- 第七章 国の弔意？

まとめと展望 戦争死者慰霊とは何だったのか、そして何でありうるのか？

全体は二部構成である。I部では戦死者の慰霊、II部では長崎の原爆慰霊がおもなテーマとなっている。そこで展開されるのは、シズメとフルイという概念を用いて、戦争死者の慰霊という宗教的な行為・儀礼のもつダイナミックな諸相を探ることということになる。ここで留意したいのは、慰霊という言葉にある「霊」である。この霊に対して、どのように向かい合っているのかを明らかにすることが本書の大きな目的だと考えられる。

著者の霊、そして死者に対する思いを理解するうえで、「われわれはさまざまな形で、死者と出会うのである。（中略）われわれは日常生活のなかでも数え切れないほどの死者と出会っていることになる。そこで死者は、完全に過去の存在であることをやめ、われわれの生きる現在にやってくるのである」（一頁）という言葉に注目しておくことが求められよう。私なり

書評と紹介

に、著者の言葉を敷衍すると、生者が会いたいと思うなら、死者はいつでも訪れてくれ、死者は生者とともに生き、死者の霊は生者のうちに籠もり、生者の霊を生かしてくれる、ということになる。

二 各章の簡潔な紹介

ここでは、各章の内容を簡潔に紹介しながら、若干のコメントをしていこう。第一章で、まず提出されるのは、「戦争死者」の概念である。先に述べたように、戦争で亡くなった死者全般を指している。それは先行研究に対する批判を踏まえて、戦闘員の戦死者だけに焦点が合わせられることによって、靖国へと収斂し、国家的な論理に絡め取られ、靖国問題に終始しがちになることを避け、戦災死者も射程に入れて、慰霊の問題を宗教学的な視点で論ずるために採られた戦略である。

慰霊という概念や行為において、慰霊、また霊をどのように捉え論じていくのかは大きな問題となる。著者は慰霊の「慰める」という語のもつ二つのベクトルを「シズメ」と「フルイ」に概念化していく。「暴力性そのものや暴力を被った結果死亡した者が現世にたいして残していたであろう想いなどを沈静化させたり、逆に喚起することで新たなアクションを起こす契機とするような事態を、「シズメ」と「フルイ」の対概念によってとらえることで、それぞれの場面の暴力連関に働く力学をとらえることができるようになるだろう」（二七頁）と述べられている。生者と死者との関係において、「シズメ」は両者の分離、「フルイ」は両者の接合となるとし、慰霊における生者と

死者の連続性の観点から捉え直すことを、著者は提起している。この「シズメ」と「フルイ」は対概念として提示されているが、決して二項対立した理念型ではないようである。暴力性との関連で、「シズメ」にも暴力性があり、やや錯綜してくるが、著者の論述を辿ってみよう。

第二、三章では、戦闘員の戦死者儀礼がテーマになっている。第三章では、中世以来の戦死者儀礼の系譜的な変遷が論じられる。戦死者の霊を飼いならす体制的な「シズメ」ばかりでなく、民衆レベルでの不特定多数の死霊に対する御霊信仰や無縁霊供養に見られるように、複合的な戦死者・死者慰霊が行なわれ、それが近代の戦死者儀礼や戦災死者慰霊の基盤を準備していったことが指摘されている。近代では、国家的な「シズメ」体制の形成、すなわち為政者が国家的に戦死者の恒常的な慰霊システムを制度化したことが新たな特色となる。一方で、国家的な「シズメ」⇨慰霊システムは戦死者を国家のために戦死したとして称揚し、国家的な「フルイ」⇨顕彰システムを作動させていくことになる。

第二章では、戦死者の町村葬や慰霊施設が取り上げられ、儀礼への関与者と死者との関係が分析されている。町村葬には、戦死者を「ウチの死者（二人称の死者）」と捉え、先祖祭祀の枠内で捉える遺族や地縁・血縁者に加えて、戦死者と直接的には関係のない地域の人々、つまり戦死者を「ヨソの死者（三人称の死者）」と捉える人々も参加していることが、大きな特徴として挙げられている。この戦死者儀礼の場は「その死の国家的意義を強調することをもって、若くして亡くなった戦死者の

霊の無念を相殺して怨靈化を防ぐという、御霊信仰の近代的展開といえるもの」であり、「地域共同体の「顕彰」を通じた新たな「靈魂管理」のあり方」(四〇頁)なのである。ここには、施餓鬼供養のような民間の「シズメ」が戦意の「シズメ」になつたり、反体制的な「フルイ」へと転化したりする可能性をコントロールする意図があったことが指摘されている。「ヨソの死者」は三人称の抽象的な戦死者となり、たやすく集合的な「英霊」などとして集合化され表象されていくと考えられるが、著者はさらに戦死者の集合化を忠魂碑のような慰霊施設で分析して明らかにしている。靖国神社に合祀され顕彰される「英霊」はその典型であるが、個々の遺族は個別性をもった「ウチの死者」として対面し哀悼している。

国家的な大義のための戦死として顕彰して、戦死者を怨靈化しない「靈魂管理」がなされ、またモニュメントなどを整備して、英霊として個々の戦死者を集合化して表象することを可能とした一方で、「このような集合化・抽象化は、同時に個別性への回路を保持したものであり、そこにウチの死者(二人称の死者)への態度とヨソの死者(三人称の死者)への態度が結び付けられるような事態が現出したのであろう」(四五頁)とまとめられている。祀られる側の集合化の一方で、町村葬などの慰霊や慰霊施設での儀礼に動員されることによって、祀る側の集合化も達成されて、かつて加藤典洋が「日本の三百万の死者を悼むことを先に置いて……」と語ったような「国民として集団的な形で集合化された戦死者に向き合う姿勢」(四七頁)も戦中から戦後にいたるまで存続してきたのである。

第三章の終わりでは、「慰霊の戦後的展開」について論じられている。戦後においても、戦争死者の慰霊・追悼式が執行されるとともに、その慰霊碑や追悼碑が建立されたが、「平和を祈念する意味を含めたものが多い」ところから、「国家的慰霊システムが機能しなくなり、それまで抑制されていた戦争死者の慰霊を契機とした暴力の遂行の停止を求める動きが登場したといえる」(七八―七九頁)。だが、その一方で、戦死者の顕彰を目的とする「戦前の国家的慰霊システムの延長上にもある」ことが指摘されている。そこには、「戦後補償の問題」があり、戦争死した時の立場に基づいて死の意義がとらえられ、「国家的枠組みでその死を弁証する必然性があつた」と論じられているが、それは補償を餌とし、また補償額を餌とした、国家的な「シズメ」に他ならないだろう。

第四章では、長崎市の原爆慰霊が取り上げられ、その展開過程を国家的慰霊システムの戦前における公的性格と無縁死没者や原爆死者一般への態度に見られる二人称的・私的関係を越えた三人称的・公共的・公開的性格という二つの公共性から論じられる。敗戦後問もなく、市主催の慰霊祭や遺体処理・遺骨収集を行なった遺族有志による自発的な慰霊祭、また万灯流し・盆踊りによる無縁死没者の慰霊などが行なわれ、後には平和祈念式典、宗教者や民生委員による慰霊祭も執行されるにいたっている。著者はこれらを「慰霊祭ライン」と「祈念式典ライン」の二つに分け、各々の儀礼形態の系譜的つながりを論じている。慰霊祭ラインは伝統的な民俗・宗教(仏教)的慰霊、特に無縁霊供養の系譜に、他方、祈念式典ラインは戦前の国家的

書評と紹介

慰霊システムの系譜にほぼ連なっている。祈念式典ラインでは、平和宣言文を検討して、死者の冥福を祈るシズメへシフトするとともに、生者に対して「平和実現に向けた呼びかけ」と変換し、死者は「平和を誓う対象としての生者を越えた超越的位置づけから哀悼の対象へと変換し、平和実現の如何は生者の世界の問題として認識されていた」(一〇九頁)ことが指摘される。この平和の誓いは原爆死者を哀悼シズメの対象とした一方で、「生者の決意を死者に向かって述べ」(一〇四頁)、原爆死者と多少とも連携もしくは連帯して、平和実現へ向けたフルイの意図もあろう。

第五章では、日本ルーテル教会の牧師、岡正治の闘いとその可能性が探られている。岡は朝鮮人原爆死者の遺骨保管や「長崎原爆朝鮮人犠牲者追悼碑」建立に関わっていく。「かつての日本帝国主義のアジア侵略戦争の担い手であったという『自己の戦争責任』において「原爆で殺された名もない朝鮮人のために、名もない日本人が贖罪する」(一二四―五頁)という罪責性の自覚、悔悛と贖罪への志向が、岡にはキリスト者として貫かれ、朝鮮人原爆死者の遺骨と対面した「痛み」の体験によって決定づけられている。朝鮮人原爆死者の「名と生命を剝奪されたという無縁性」を前にして、無名の日本人が一市民として向かい合い、「歴史的責任を引き受け、「贖罪」をはじめようとした」(一三三頁)と著者は指摘する。「長崎忠魂碑訴訟」では「忠魂碑に込められた差別性」への批判があった。しかし、岡は慰霊の宗教性に論争点として固執するあまり「リゴリズム」(二四二頁)に徹し、遺族との「対話と連帯の可能性を閉

ざし、問題そのものを固定化してしまう結果をもたらしてしまった」のではないかと著者は指摘している。

第六章では、講義中に被爆死し、準軍属として認められ、靖国神社に合祀され、さらに叙勲までされた長崎医科大生に対する遺族たちの慰霊行為が取り上げられる。戦災死者であり、かつ戦死者でもあるとみなされた戦争死者のケースである。この遺族会にとっては、準軍属の地位や靖国合祀は経済的な補償問題にのみ帰結するものではない。「犬死」「無駄な死」としてではなく、「死の意義付けについて問うもの」であり、「国家のために亡くなったという点」(一五三―四頁)に意義が見出され、靖国合祀がそれを承認したと受け止められた。著者は慰霊碑や銘碑、また遺族会誌の検討を通じて、顕彰によるシズメの機能とともに、個々の哀悼によるシズメもあつたことを指摘している。この遺族にとつて、慰霊は死者と自分のシズメとして始まったが、それが「死の意義付け」を求めて、フルイへと転換させ、準軍属の地位獲得と靖国合祀によってシズメへと回帰していったのであろうか。

第七章では、広島と長崎に開館した国立の原爆死没者追悼平和祈念館が取り上げられる。この施設は国が「平和祈念・死没者追悼」、「記憶の継承」や「被爆体験の継承」の目的で設置したが、被爆者や原爆死者の遺族は原爆死者との「失われた記憶を求め、死没者の追悼を求めている」(一七六頁)とともに、「死没者の無縁化に対する(中略)祭祀継承者のない遺族のおそれ」また「遺影の永久保存に(中略)遺族が見出す「永代供養」的扱いへの期待」をこの施設に求めた。この施設を建てた

「国の弔意」は被爆者や遺族などの慰霊のために遂行している「柔軟さから追悼するという姿勢を学ぶ必要があるだろう」（一八五頁）というのが、著者の提起である。

三 本書へのコメント

ここでは、各章の説明がかなり長くなってしまったため、最終章「まとめと展望」を踏まえながら、コメントをしていきたい。本書は戦争死者の用語を通して、慰霊をめぐって戦死者と戦災死者・原爆死者を相互に関連づけながら論じ、新たな地平を切り開いたユニークな書となっている。それは、著者の問題意識、そして構想が戦争ひいては戦争による死者を靖国問題にのみ狭めず、慰霊に関わる信仰や儀礼をその多種多様な関与者（生者・団体）ばかりでなく、死者にも関連させて、幅広く開けた領域に位置づけているからだといえよう。大胆であるとともに、すぐれて繊細な手法、もしくは戦略が本書全体に貫かれ、きわめて魅力ある論考となっている。

著者は「シズメの技法」という言葉を用いて、三つの慰霊の様相をあらためて検討している。まずは「体制的シズメの遂行と民間のシズメの接収」である。シズメは中世で体制内化され、近世にさらに徹底化されるにいたり、近代の国家的慰霊システムでは「そのような歴史的・国家的意義付け」顕彰がさらに称揚されるようになる」（一九二頁）一方で、遺族や民俗的共同体のシズメは抑圧され接収されることになる。後に述べられているが、この体制的シズメは戦死に国家的意義を強調するという点では、「体制的フルイ」と連動しているだろう。敵の

死霊をシズメる一方で、味方の死霊は守護神的にフルイのために活用されるからである。幕末維新期の「天皇が御代をば常磐に堅磐に守らい幸はい」ために招魂され「忠魂」とされた「殉難者の霊」、また「護国の鬼」といった戦死者の表象はなによりもフルイの技法によるもの、あるいはシズメとフルイの技法を連動させようとしたものといえよう。

原爆死した長崎医科大生の遺族の運動は、戦後での体制的シズメの事例だが、かなり複雑である。戦死を「犬死」「無駄な死」としたのは、戦争の責任が軍部・軍人に帰せられた敗戦後間もなくである。軍人遺族は世間から冷たい眼ざしを注がれたばかりでなく、軍人恩給もなくなった。原爆死した医科大生の遺族はそのようなことはなく、原爆という惨禍のなかでの集団的な死として捉えられ、民間でのシズメの慰霊が行なわれていたが、独立後、準軍属として援護されている「動員学徒の原爆犠牲者」との差別によって「犬死」とする意識が現われ、その死に「国家的な承認」を求めようとする動きが出てきたといえる。国家の援護や死・死者の意味づけの要求は一九六〇年代初めに始まり、それ以前にはなかった。靖国合祀はそのためのひとつの戦略ではなかったかとも考えられよう。六〇年代末から、靖国国家護持運動が盛んになっている。靖国神社はシズメのみではなく、フルイの慰霊機能を復活させていった。とするなら、遺族たちはこの運動に体よく利用されたことにはならないだろうか。準軍属として原爆死した医科大生の霊、また遺族の意思はシズメられたのである。それゆえ、著者は「慰霊の暴力性は、考慮されなかった」と指摘し、「原爆死であったとい

書評と紹介

う性格のほうは、果たしてこのような国家的な承認のレベルで十全に受け止められたのか」(二五四頁)と疑問を投げかけざるをえなかったのだろう。

ついで「体制的シズメのための民間のフルイの接收」である。民間の御霊信仰が体制内化され馴致されていったプロセス、維新期に「草莽」の「殉難者の霊」を「忠魂」として招魂社・靖国神社に祀ったこともそれである。私には、原爆死した医科大生の霊の靖国合祀も同様のものと思われる。そして、「体制的フルイの称揚と民間のシズメの抑制」である。著者が「シズメとフルイとは容易に反転するものである」(一九六頁)と指摘するように、体制的フルイは体制的シズメと連動していったと考えられるが、戦前・戦中の国家的慰霊システムの特徴はここにあったのだろう。民間の自発的なシズメは抑制されたことも確かだが、アジア・太平洋戦争でも忠魂碑の建立は統制されつつ続行され、また戦死者個人の墓碑を建立する際には階級や戦死状況などを記しているように、体制的シズメ・フルイの技法に回収され水路づけられていったのではなからうか。著者の用語を用いるなら、体制的シズメ・フルイの称揚による、民間のシズメ・フルイの抑制・回収と補完化ということにならう。さらに「対抗的フルイの登場」である。戦争死者の慰霊を契機として、暴力の遂行停止を求める平和運動がそれである。たとえば、平和行進のように、慰霊とはあまり関わりなく、「霊」という観念」を介在させなくとも、なんらかの形で意味づけた死者像を想像し構築することによって、対抗的フルイが発揮されていることであろう。かつて三島由紀夫が『英霊の声』で、

二・二六事件の刑死者や靖国神社に英霊として祀られるシズメ・フルイを否定した特攻隊員の霊を現前させ交感させて、その語りを描き、戦後社会を呪咀させたように、国家や市民社会への対抗的フルイを喚起することもあるう。

著者は「民俗社会における三人称的な無縁死没者(無縁霊)」に対処する「無縁空間」の概念を提起し、そこに第五章で論じられた岡正治の提起した「無名」(二〇三頁)の姿勢を想起して、体制的なシズメやフルイに翻弄されない可能性を見出している。この「無縁空間」またその「無名性」も、歴史的に見れば、著者の指摘するように、「容易に権力空間によって侵食・接收されてしまいかねない」(二〇〇頁)が、飢饉や戦禍などの自然的暴力や他律的暴力に見舞われた無縁霊・施餓鬼供養における無縁の死者・無縁霊に同じ心情(同情心)をもって歴史に関わってきたように、「一人称的死への実存的不安」を通じて、「無名性」をもって「三人称的領域として無縁空間」(二〇一頁)を生成することができ、他者の死、著者のいうヨソの死者とも関わり合える可能性が出てくるのではなからうか。

このように考えるなら、「敵国をはじめとした他国の死者」あるいは「アジアの二千万の死者」などを想像できる可能性も生まれてこよう。私には、ウチ/ヨソの死者と二分化して論じた、この部分がかかり分かりにくかった(四八頁)。「近代日本におけるヨソ(外)認識の多層構造化は(中略)イデオロギー構造のもと身近な「ヨソ」を次々に「ウチ」化」(四八頁)するような、武力による侵略戦争を遂行していったが、ウチには階層的な差別構造が設けられるとともに、ヨソは外部としてつ

ねに排除されていった。ヨソの死者はそのままヨソの死者として無視され、あるいは隠蔽されたといったほうがいいだろう。蛇足ながら付け加えると、著者のいう二人称の死者をミウチの死者、三人称の死者をウチの死者と、内部をミウチとウチの二重構造とし、無視されを排除される外部の死者をヨソの死者として、三重の構造によってとらえるなら、敵国などの死者が不可視にされた歴史的なプロセス、侵略戦争を遂行したにもかかわらず「加害者性」が現われてこない「歴史認識」のあり様も明るみに出すことができるのではなからうか。

やや手前勝手な論評を行なってきたが、これも本書のすばらしさに触発されたからに他ならない。著者に感謝するとともに、今後の発展を期したい。

大貫 隆著

『イエスの時』

岩波書店 二〇〇六年五月二三日刊
四六判 ⅩⅩ十二九二頁十一五頁 二九〇〇円十税

土 井 健 司

キリスト教の端緒に位置付けられるナザレのイエスを中心に、イエス以前のユダヤ教黙示文学、そしてイエス後のパウロの時間論を解釈したものが本書である。なかでもイエスの部分は前著『イエスという経験』をめぐって提示されたさまざまな論評、批判に触発されて書かれ、多分に応答的な内容になっている。なお『イエスという経験』へ言及される箇所では引用とともに必要な説明がなされているので、前著を引かずとも理解できるよう配慮されている。そして分量として本書の半分を占めるのは、前著では扱われていないパウロに関する論述である。その意味でもイエス解釈に徹した前著の続編だと言える。まずは全体の目次を書き出してみたい。

第一部 救済史を超えて——旧約聖書・ユダヤ教黙示思想との対話

第I章 「モーセ五書」と「申命記史書」におけるアブラハムとモーセ